万年時計のまわる音
鉢尾小説再録集

逡巡狐狸

黎明

万年時計のまわる音 鉢尾小説再録集

狐狸逡巡（こりしゅんじゅん）

はじめに

成人してから落乱に再会して沼に落ち、気付けば10年以上が経っていました。節目の年はツルッと過ぎてしまったので、初のCPオンリー開催のこの機会にWeb掲載作品を再録としてまとめることにしたのですが、拙過ぎる作品が多くあったので、再録と言いつつ全体的に手を入れています。それでもなお拙い部分が多々あろうかと思いますが、Web掲載作品をまとめた自己満足本をお手にとってくださる奇特でお優しい皆様は大目に見てくださると勝手に信じてます。
自称夜明けのいにしえの腐女子の、多少ブラッシュアップを施した黎明期の作品を紙面でもお楽しみ頂ければ幸いです。

目次

【室町】

悋気の糸の先に …… 2
狐狸蜜月事情 …… ♥ …… 14
夜半の戸締まり御用心！ …… 20
万華鏡 …… 26

あわいろの花びらに想いを載せて …… 34
こいいろの花びらで願いを刻んで …… 37

愛だけでは、…… ♥ …… 41
匂い立つ夏の相克 …… ✤ …… 46
どこまでも渇くから …… ♥ …… 56

絆され堕ちた、先は朱 …… 60
堕とした末は、深き朱 …… 67
朱くなれども、俺は俺 …… 74

【凡例】♥R18　✚オメガバースパロ

好奇心は、狐狸をも……♥……77
蓼食う虫も、……♥✚……103
かんえもんのチャーム！こうかはばつぐんだ！▼……136
見えない、言えない、届かない……144
春きたりなば、冬つらからじ……155

【室町・死ネタ】※黒縁取りページ

暴かれるもの～秘密と特別～……172
かたみわけ……182
想いのかたみに……190

【現代パロディ】

窓の向こうで消えゆくゆめのせかい……198
光熱費と桃の誘惑……201
三郎の日……206

贈り物は嘘で飾って……212
贈り物は期待を纏って……220
贈り物は真実を説く……232

陽炎の背を追う……241
もう少しだけ、曖昧なままで……244

室町狐狸合戦！Web連載版……251

狐狸
しゅんじゅん
逡巡

室町

悋気の絲の先に

持ち主の動きに合わせて豊かな黒髪が揺れる。クセのある艶やかな漆黒の流れに細い紅の髪紐がよく映える――……。

その様に暫し目を奪われていた鉢屋三郎はハタと我に返り首を振った。

違う違う。あんなすっとぼけたとりわけ美人でも華奢でも色白でもない食い意地張ってる食えない狸みたいなヤツなんぞに見惚れるなんてあり得ないあってたまるか。……まぁ、髪はクセはあるが滑らかできれ、……いやいやいやきれいというなら六年い組の立花仙蔵先輩のサラストで……。

「どうしたの三郎？ あっ、勘右衛門と兵助じゃない。おーい、かんえもーん！ へーすけー！」

ここ最近三郎は、度々同じようなことを脳内で唱えていた。今日もまた脳内呪文を唱え己の思考と行動を否定せんと躍起になっている三郎を、彼と瓜二つな外見の同級生不破雷蔵が覗き込み、目線の先にいる人物を認めて屈託無くその名を口にした。

名を呼ばれた瑠璃の背が二つ、同時に振り返る。動作に合わせて黒髪と紅い紐が踊り、陽光を弾いて煌めいた。三郎は思わず目を細めた。その人物は笑顔で手を振る雷蔵(と恐らく三郎も)を見つけるとぱっと笑顔になり、小走りで駆けて来る。

「雷蔵、三郎おーっす！」

バカみたいな笑顔。

元気のいい勘右衛門の背後から共に駆けてきた兵助が片手を軽くあげるだけの簡単な挨拶をする。何してたのと尋ねる雷蔵に兵助が答えるのを尻目に、会話を眺める体勢に入っていた勘右衛門の頭部、先ほどから視界にチラついている紅い色を三郎は指差した。

「その髪紐、どうしたんだ？」

「お、目ざといなあ三郎！ さっきタカ丸さんに髪結って貰ったんだ～。なかなかの上物で兵助とお揃いなんだぜー、いーだろ！ 似合う？」

勘右衛門は体をひねって髪紐が三郎によく見えるようにしながら嬉しそうに答えた。予想どおりの回答を、全開の笑顔で。言われて勘右衛門の隣に目をやれば、なるほど同じ色の

紐が彼のふわふわとした黒い髪を括っていた。

本当は脳内呪文など全く効果がないことに、三郎はずっと前から気づいていた。兵助が同じ髪紐を付けていることにも気付かないほど三郎の目には勘右衛門しか映っていないのだ。彼のクセの強い豊かな黒髪を、バカみたいに明るい笑顔を、菓子を幸せそうに頬張る様を、授業中の真剣な横顔を、もう長いこと見つめてきた。触りたいと思い、己のものにしてしまいたいと願い、それらをこらえてきた。

それはひとえに、勘右衛門の思いが兵助に向いていることを見つめる内に察していたからだ。

兵助と共にいる時、勘右衛門は普段よりも柔らかい表情を浮かべるし、抱きついたり膝枕をし合ったりとスキンシップが過剰だ。三郎はその様をただ指を咥えて眺めるだけなのだ。最も長い時を共に過ごして来た二人の間に入れる者など存在しない。尤も恋敵とのじゃれあいに混ざりたいなんてついぞ思ったこともないが。

兵助が己より勘右衛門と親しいことは明確で、彼の幸せを考えるなら茶々を入れるくらいで溜飲を下げざるを得ない。だが今回は話が別だ。――斎藤タカ丸に髪を結って貰った、だと？　カリスマ髪結いの息子とはいえ一つばかり年嵩の後輩の男に髪を触られて何がそんなに嬉しいというのだ。何の変哲もない普通の髷だし特別なことと言えば紅い紐を貰っただけじゃないか。……確かに兵助とのお揃いは嬉しいのかもしれないが。他の人間に髪を触らせて嬉しそうにしているのが大変面白くない。

「似合わん。派手過ぎ」

嫉妬の炎に炙られる己を悟られまいとして、三郎は無感動でつっけんどんな評を返した。そしてそんな己と原因の紅色から目を逸らし、自ら話しかけたくせに兵助と雷蔵の会話を聞く姿勢をとる。

「えぇー……、タカ丸さんの見立てなんだけどなぁ」

勘右衛門はつまらなそうにやや唇を突き出しはしたものの、それ以上は何も言わず兵助たちの会話に混ざった。

＊＊＊

「へそ曲がり」
「は？」

委員会後の片付けの最中、唐突に落とされた呟きに三郎は態度の悪い返答をした。可愛い後輩たちは既に帰し、この場に居るのは勘右衛門ただ一人だ。変に気を使う必要はない。逆を言えば勘右衛門が相手だからこそできる遠慮のない態度であった。

「髪紐の話した時、機嫌悪かったね」
「そんなことはない」
「それがへそ曲がりだって言うのー。素直じゃないよな三郎は。ヤキモチ焼きのくせに」

知ってか知らずか、ぶっきらぼうな己の態度を咎めることもなく呆れた風に笑う。そんな勘右衛門の意味ありげな言葉尻に、三郎は瞠目して沈黙した。

表情こそ見ていないが、得意そうな声音で髪紐の件に関して『ヤキモチ焼き』という表現をした勘右衛門。確かにあの時は自分から声をかけておいてひどいことしか言えなかったが……あまりにも不自然な行動だったのだろうか。己が嫉妬していたこと、この胸に秘めた思いに彼は気付いてしまったというのか。三郎の額に嫌な汗がにじむ。

しかし何故今ここで、その話を持ち出す必要がある？

言外に「素直になれよ、思いを打ち明けろ」と言っているのだろうと受け取ったが、その意図が三郎には分からない。自分は兵助が好きだから釘を刺しておこうとでも思っているのだろうか？ そんなことは十二分に、嫌というほど思い知らされてきているというのに、それに飽き足らず息の根すら止めようと言うのかお前は。

三郎は片付けを続けているフリをしながら、焦りと羞恥でいっぱいいっぱいの頭脳を駆使する。

勘右衛門の態度がやたら得意気だったのも気に食わない。そんなやつにふられると分かった上で素直に告白するなんて虚しく腹立たしい。そんな状況に己が陥るのは絶対に許せることではない。

考える内に次第に落ち着きを取り戻していった三郎は告白をしないことを固く誓うと、さてではどうやってこの場面を切り抜けようかと思索を巡らせ始めた。

「羨ましかったんなら素直にそう言ってくれれば、その場で譲ってやってもよかったのに」
「……、はぁ？」

だが唐突に、これまた呆れた様子で脈絡のない言葉が投げかけられた。思わず訊き返し首を巡らせた三郎は「我得たり」と言わんばかりにニヤリと笑う勘右衛門とかち合った。

「トボけなくていーって！　兵助とオソロが羨ましかったんだろ？　あ、三郎が兵助を好きってことはおれしか気付いてないし邪魔する気なんてないから安心しろよな。この髪紐譲ってやるよ。ま？　おれには派手すぎたみたいだし？　後で別の紐見たてて貰うからぁ～～あーおれってホントいいやつーぅ」

ひょうきんな口ぶりで一息にまくし立てられ呆気にとられた三郎は、その後我に返り彼の発言を改めて咀嚼した結果、思いっきり眉根を寄せて口を歪めた渋い顔にならざるを得なかった。

兵助を好き!?　私がか!??　何をどう受け取ったらそうなる!?!

「……あ、アホかお前!?　違ッ――」

「あーいいからいいから。ホント照れ屋だなもー。ちょーっと待ってろよー」

驚愕のままに後先考えず反射的に反駁したが、勘右衛門は三郎の心中も知らずにぞんざいにいなした。勘右衛門を想う三郎にとって間違いなく、最悪の展開だ。つまらない自尊心を優先させず素直に告白し玉砕する方がはるかにマシだったという状況に見事に追い込むスーパー曲解を披露した男は、慈愛のこもった可愛らしい笑みを浮かべて三郎を見つめつつ髷に手を伸ばす。くっそいい笑顔しやがって、とその笑顔に見惚れながら三郎はどうやって彼にそれが勘違いであることを諭したらいいのかを死に物狂いで考える。試験の類でさえここまで必死に頭を働かせたりしないのに、などと情けない愚痴をはさむ余裕すらなかった。

「……む、取れないな。三郎、外してー」

三郎が必死で考えを巡らせているとも知らず、暫くひとりモゾモゾやっていた勘右衛門は髷を解くのを諦めたらしく、それだけ言って三郎に背を向けた。

瑠璃を背景に艶めく豊かな黒が広がり、その暗色の中に細く紅い色が鮮やかに浮き上がる。先刻太陽の下で見た美しいその様が、薄暗い室内で妖しくも楚々とした色香を纏い三郎の目の前に広がった。凄艶なそれに一瞬で心奪われた三郎は、勘右衛門の勘違いを訂正することも忘れて、誘われるようにゆっくりと、その美しいものへと手を伸ばした。

指に触れたそれは意外にも冷たくはなかった。

つやつやと輝く髪をただ眺めている内になんとなく冷たいのではと思っていたが、冬でも湯上がりでもない人間の毛髪が冷たいわけがない。そう頭の隅で冷静に自嘲しつつ、目の前にある髪に魅入られたようにそっと両の手で触れる。

思っていたよりも硬く、しかししなやかな黒い髪は三郎の手のひらをつるりと滑る。量が多いのかある程度重みがあり、夜を溶かしたような漆黒であるのも相まって重厚な存在感を放っている。三郎はずっと触れたくて仕方なかったその髪を、左右の手に交互に載せては滑らせて心地よい重みと滑らかな感触を楽しむ。

暫く楽しんだ後、今度は片方の指を髪へ差し込んで手櫛(てぐし)の要領で髪を梳(と)かしてみた。勘右衛門の髪は三郎の指の間を引っかかりもなくするりと通り抜ける。指の股に感じるやや冷たい感触も気に入り、飽きもせずその動作を繰り返す。

そうしている内に三郎は、ふと髪の一部を持ち上げた手と梳(くしけず)る指で出来る隙間から白い色がちらちら見え隠れしているのが気になった。魅入られぼんやりとしていたために、手をずらし全体を直接目にしてようやくそれが勘右衛門の首だったことを知った。気付いたと同時に釘付(くぎづ)けになってしまう。

明るく元気で活発な性質の勘右衛門はどちらかと言えばやや浅黒い肌をしているはずが、この豊かな髪に守られて陽に焼けなかったのだろう、髪の色とは対照的な生白いうなじがそこにあった。見るからになめらかで匂い立つような色香を放つ勘右衛門の白いうなじ。強い欲求に駆り立てられた三郎は、髪の間から両手を差し入れてそれをそうっと撫(な)でた。

「ッうひゃ、!?」

思ったよりも温かくなめらかだと一瞬感じただけで、その魅力的なものは三郎の前から失われた。勘右衛門が妙な声をあげて飛び上がり身を引いたからだった。驚いた三郎は降参のポーズのように両手を小さく挙げたまま固まる。

勢いよくこちらを振り返った勘右衛門は、ひどく驚き混乱した顔ですくめた首を両手で押さえていた。心なしか顔が赤いなと思った瞬間、押さえたままの首筋まで一気にぶわっと朱色に染まった。その変化に、三郎は目をくっと見開いた。

「、なっ、なにすんだよ……っ!?」

赤い顔は数度口を開閉した後ようやくそれだけ言い放った。まるで金魚だなんて冷静な感想が一瞬だけよぎったが、三郎

のすべての感覚は、今目の前にいる、全身から抑えられない焦りと羞恥が吹き出ている勘右衛門に注がれていた。
上物の美しい髪紐よりももっとあでやかで愛らしい紅い色。その反応、その仕草、それらから導き出される一つの可能性――三郎はそれが現実であって欲しいと心の底から願った。
「ちょっと掠ただけだろうが、何慌ててるんだ」
呆れた風に手を腰に当て、ややぶっきらぼうな感じを装いつつ不審げに勘右衛門を見やると、物言いたげに上目使いでこちらを窺っていた勘右衛門は気まずそうに顔を逸らすと今一度背中を向けた。
「――……さっさと外せよな」
背中でぶつぶつ文句を言いつつ首だけはしっかり防御している。そんな勘右衛門に、三郎はすぐには手を伸ばすことはせず、ただ真意を探るようにじっと見つめた。
「――……なに。さっさと外せって、言ってるだろ」
背中に注がれる三郎の視線に気付きながらもじっとしていた勘右衛門だったが、暫しして耐えかねたのかぶすっとした態度で悪態をついた。身体の向きを変えること泣く肩越しに視線を寄越した彼の頬と耳はまだ赤みを帯びている。三郎はそれをしっかりと確認した上で、賭けに出ることにした。
「髪弄ってた時は黙ってたのに今度は急かすのか。何の違いだ？」
どストレートの質問。変装名人の異名を持ち道化師のような振る舞いを得意とする三郎が、何の計算も裏もなく。夢中になっていた時には気づかなかった、求める答えに直結しているであろう疑問そのままを勘右衛門に投げかけた。
対して彼はうぐ、とあからさまに言葉に詰まった。それは三郎の願いが現実であることを意味していると読み取れた。しかし相手は勘右衛門だ。無言でもって言葉での回答を要求する。先ほどのスーパー曲解事変から早速学んだ優秀な鉢屋三郎は、それが現実である確約を欲していた。
「――べ、別に意味なんか、ない。……いいから、外せよ」
混乱から未だ抜け出せずにあがく勘右衛門は、大変不本意そうに大変お粗末な言い訳をして三度、三郎に背を向けた。

暫しの沈黙の後、三郎は仕方ないとため息をついて勘右衛門の髷に手を伸ばした。彼が、特に自身のことに関しては強く決意したらテコでも動かぬ頑迷さも併せ持つ人間であることを三郎は熟知していた。

紅い紐は、存外あっさりと外れた。黒い髪がばさりと重たげな音を立て重力に従って瑠璃の肩や背に落ちる。その時一瞬勘右衛門が俯いたような気がしたが、瞬きの後には彼は軽やかに身を翻しこちらに手を突き出していた。

「じゃ、その髪紐はやるから。代わりにお前の紐貸しといて」

何事もなかったような態度を取る勘右衛門に、三郎は目を細めた。ここまで来てまだ誤魔化そうとあがくか。だが願望が現実となる可能性が確信に変わった今、彼を逃がす気など微塵にもない。

「知ってのとおり私は髢を付けているだろう？　外せないから交換はできないな」

困ったように眉尻を下げそう嘯くと、勘右衛門は片眉を跳ねあげた。嘘を見抜いている――楽しくなった三郎は内心だけで笑いつつ、眉間にしわを寄せる勘右衛門を眺めた。

髷が偽物だから髪紐を外せないのは嘘ではないが、自分は変装名人の名をほしいままにしている鉢屋三郎である。無論、変装道具の一つとして予備の髪紐を数本、懐に持っている。だから交換できないというのは嘘だ。

だが心底嫌そうな顔で探るように見つめてくる警戒ぶりを見るに、発言の内容を嘘だと思っているというより、どうも三郎には自分に対して思うところがあり何かを企んでいるらしい、と認識しているようだ。普段は天然でスーパー曲解を繰り出すようなスットボケ野郎だが、さすが優秀ない組の学級委員長を務めているだけある。侮れない。長年連れ添った雷蔵でも嘘くらいはなんとなく分かるだろうが、心に面を着けることを得意とする三郎の意図をここまで正確に読み取れはしないだろう。自然と口角もつり上がると言うものだ。

先の言動が偽りであることは既に読まれてしまっているが、気にせず困り顔のままじっと見つめる。すると、警戒を解かないままの勘右衛門が突然赤くなった。何事かと目を瞬かせた三郎だったが、勘右衛門は何も言わずただうっすらと軽蔑の色を宿した目で三郎を睨めつけてきた。また何やら勝手に勘違いしていそうだなと思いながら眺めていると、勘右衛門はさっさとこの場から立ち去ろうと思ったらしく素早い所作

で腰を上げた。

「そのまま出るつもりか？ 就寝前でもない今時分、髪を下ろしたままじゃ相当目立つぞ。結ってやるから座れよ」

的を射たことをさも親切そうにしゃあしゃあと言ってのけると、勘右衛門は心底憎々しげに三郎を睨(にら)みつけた。次いで先ほどと同様にずいっと片手を差し出した。

「じゃあ自分で結うからそれ返せ」

「断る。私が解いたのだから私が結う」

勘右衛門の要求を突っぱねた三郎は、勁い視線で勘右衛門を見上げる。

普段は意外にも頑固な勘右衛門に三郎が折れてやることが多いのだが、今回は絶対に折れない。勘右衛門を逃がしてやるつもりはないのだ。

暫し無言での睨み合いが続く。やがていつまでも折れない三郎に根負けしたか、勘右衛門は舌打ちを一つすると渋々と言った風情でこちらに背を向けて座り込んだ。もちろん両手で首をしっかり守り、全身で三郎を警戒したままで。そんな勘右衛門の態度に、三郎はつい目元を和らげた。

刺激しないようにゆっくりと近づいて、そっと髪に触れる。触れた瞬間、彼がぴくりと小さく反応を返したが三郎は気付かなかったふりをした。

「――なあ勘右衛門。何故、私が兵助を好きだと思った？」

勘右衛門の髪を手櫛でゆっくり丁寧に集めながら、三郎は静かに問う。

「――……三郎、合同授業の時とか、よくおれらの方見てるだろ。時々、……兵助とじゃれてる時には特に、おれのことすげー怖い顔で見てんじゃん。そりゃ分かるって……」

「へぇ、勘右衛門は私のことよく見てるんだな」

暫しの沈黙の後、ぶすっとした態度で『三郎が兵助を好き』な根拠をボソボソ述べる勘右衛門に、三郎は若干からかうように含みのある言葉を放った。勘右衛門は赤かった耳をさらに赤くし、苛立(いらだ)った様子で口を開く。

「お前が、見てるんだろ！」

「まぁ確かに私はお前たちをよく見ていたし、お前が兵助とベタベタしてるのが気に食わなかったのも事実だ、認めよう。

しかしお前が私を見ていなければ私が見ていることには気づかないだろう？　お前も私をよく見ていたということだよな。それで、他には？　まさかそれだけとは言うまいな？」

勘右衛門はさらに反駁（はんばく）したそうだったが、それ以上言っても無駄だと思ったのか求めに応じて別の理由を口にする。

「――……お前兵助の言うことには割と素直に従うだろ」
「優秀と言われるだけあって兵助の発言は理にかなっている場合が多いからな、妥当と思ったら同意も従いもするさ」
「火薬委員の一年生見かけるといそいそと絡みに行くし」
「そりゃ伊助だからだろうが。可愛い後輩の親しい級友にも絡みに行くのは当然だろう」
「ランチに豆腐が出ると兵助に絶対あげてるだろ」
「――……あれは、無言の圧力がだな……」

豆腐の話で三郎は思わず脱力した。兵助に豆腐をやっているのは好意からではなく、勘右衛門に対する三郎の想いを察知した勘右衛門第一主義者の兵助に奉納しているに過ぎない。元々豆腐にそれほど執着心もないし、時折殺気すら感じる輩から身を護（まも）るためならば豆腐断ちなど安いものだ。

同時に三郎は、今までの己を馬鹿みたいだと思っていた。三郎はずっと、勘右衛門をよく見つめていた。だが彼もまた自分のことをこんなにも見ていたのか。嬉しくはあるが何故これまで少しも思い至らなかったのだろうか。何故、未だにこうも食い違ってしまっているのか。――勘右衛門が鈍感だから、という答えである気がしなくもない。

「大体、兵助の言うことには従うと言ってたが。お前兵助と一緒だと、解説やら作戦提案やら出番やら何もかも全部兵助に譲ってるだろうが」
「おれより兵助の方が優秀だし」
「そう思ってるのはお前だけだぞ」

三郎は整え終えた彼の髪を、そのままぐいと引っ張った。予期せぬ出来事に勘右衛門は後ろへ転がり、艶やかな黒髪が三郎の膝や床に散る。三郎は狙いどおり転がり込んできた彼の身をすかさず膝で挟み込んで拘束した。嫌がる勘右衛門に暴れる隙を与えずにその頬を両手で包んで固定すると、顔を寄せ至近から覗き込む。途端、勘右衛門の顔が朱に染まった。その可愛らしい反応を間近で見ることができた三郎は内心でむせび泣きつつガッツポーズをした。

「なあ勘右衛門。お前が思いの外私をよく見ていてくれたの

はよく分かった。だがお前は勘違いしてる。私はな、お前が私を見ていたようにお前を見てたんだ。お前が気付くよりも前からずっと、な……」

一字一句漏らさず勘右衛門に届くようにゆっくりと告げる。三郎の告白に一瞬目を丸く見開いた勘右衛門は、しかしどういうわけか顔を更に紅潮させて目尻を吊り上げた。

「……だ、れがそんな嘘……ッ！　馬鹿にするなっ……！」

憤然と繰り出された勘右衛門の蹴りを躱した三郎は、着地した勘右衛門に足払いをかけ再び床に沈めた。鉄拳が飛んでくるより早く上から覆い被さって動きを封じ、怒りの言葉が飛び出す前に唇を塞ぐ。想像していたより柔らかい感触に、己の拍動が猛烈な勢いで加速していくのを感じる。

「――……っ、……な、……なに……っ!?」

唇を離すと、勘右衛門はゆでだこのように首まで真っ赤になった。元々丸い目をさらにまあるく見開き呆然と手で唇を抑えている様がまた可愛くて、三郎はその手を退かせて再び唇を寄せた。今度は触れるだけでなく柔らかいそれを食んで舌でくすぐる。優しく愛撫しながら薄目で窺うと勘右衛門が頬を紅潮させたままぎゅうと目を閉じているのが見え愛しさがさらに増す。思う存分柔らかなそれを堪能してから解放してやった。息を詰めていたのか呼吸を乱した勘右衛門を微笑ましく見下ろした三郎は、恋しい彼を手に入れるべく真実を説きにかかる。

「さっき言った通り、私はずっとお前が好きだったんだよ」

「……うっ、嘘だ！　お前は、兵助が――」

「お前が勝手にそう思い込んでただけだ。根拠とした行動については先ほど全部説明したが？　ああ言わずとも察したとは思うが、兵助とじゃれてる時睨んでたのはお前らがベタベタベタベタイチャイチャイチャイチャ無駄にひっついてたからだからな。私には全然寄って来ないくせに四六時中くっ付きやがって……」

「っでも、」

告白の隙間に嫉妬に炙られていた時の恨み言もねちっこく挟む。それでも頑なに否定し続ける勘右衛門に、三郎もいい加減焦れてきた。首に触れた時や口吸いした時の反応から見て意識はしているくせに、ここまでしても、ここまで言ってもまだ分からんというのか。大体最初の態度はなんだ、好

きな奴の恋路を応援するなんて辛いだけだろうに馬鹿じゃないのかこいつは。そんなに私が好きか！

　三郎は勘右衛門の思いの深さに強烈な悦びを感じつつも、好いた相手の恋路を応援するなどと自らの幸せを軽んじた上に三郎の中にある勘右衛門への思いを認めようとしない彼の頑固さに怒りを覚えてもいた。三郎が必死で隠してきた、本人ですら持て余していた慕情の存在を否定するか——ならば分からせてやるまでだ。

「私も触ったことないのにタカ丸さんなんかに髪を触らせて、ものすごく嬉しそうにはしゃぎやがって。——似合ってないなんて、……ただの嫉妬だ。お前のきれいな黒髪に、とてもよく似合ってる」

　散らばった髪を一房掬い上げ唇を寄せながら、率直な心情を馬鹿みたいに甘い言葉にして唇にのせる。勘右衛門はより一層肌を紅潮させ酸素が足りない魚のようにぱくぱくと口を開閉させた。それに目を和ませながら「このまま陥落させてやればいいのでは」と閃いた三郎は睦言のように甘ったるい言葉を次々と綴っていく。

「さっきお前の髪、つい堪能してしまった。そしたら間からうなじが見えてな——……誘惑に負けた。掠ったんじゃない、触りたかったから撫でたんだ。驚かせたのは悪かったがお前のうなじがエロ過ぎるのが悪い。やらしい色気放ちやがって……我慢できるか。もうずっと前からお前に触「うわあああああああああああやめろやめろやめろおおおおお!!!!!!かゆい！　全身がかゆいいいいいいいいいい!!!!!!!!!!!!」

　それまで静かに睦言を甘受していた勘右衛門が突然大声で叫んで三郎を突き飛ばし、全身を激しく掻き毟った後、頭を抱えてその辺をゴロゴロとのた打ち回った。呆気にとられた三郎がただその様子を眺めていると、暫しして彼は三郎から少しだけ離れたところでピタリと止まった。恐る恐る遠巻きに窺うと、抱え込んだ腕の隙間から若干涙目おまけに半笑いの顔でこちらを見上げてきた。

「…………………三郎、超キモい……」

「キモい言うな!!!」

　今度は三郎が赤くなる番だった。二人きりで相手が呑まれている間は問題なかったが、我に返ると恥ずか死するような代物だったのだ。

　未だぷるぷると肩を震わせて笑っている勘右衛門に、羞恥

で顔を火照らせた三郎は舌打ちをすると拗ねた顔でそっぽを向いた。やがて、ようやく爆笑が落ち着いた勘右衛門が這いよって来て、そっぽを向いたままの三郎の衣をついと引いた。

「……なぁ。おれを好きって、本当？」

「――……嘘でそんなこと言うか、馬鹿」

そんな不安そうな顔をすることもあるのか。袖を摘まんだままの勘右衛門の見慣れぬ姿に心ときめかせつつも、三郎はぶすくれた態度を崩すことなくぶっきらぼうに答えた。途端、こちらを見上げる瞳がじわりと滲んだ。泣きだしそうな笑みを載せた丸顔が小さな声で乞うてくる。

「じゃあさ、もう一回。ちゃんと言ってくれる……？」

言葉を求めてくる彼があまりにも必死で愛しさがこみあげてくる。衝動のままに勘右衛門の身体をかき抱いた三郎は、その耳元にそっと囁いた。

「ずっと前から私は、――……勘右衛門。お前が、好きだよ」

万感の思いを込めて告げると、背中にそろりと腕が回され強く抱きしめ返された。腕で囲った勘右衛門は華奢でもなく、三郎と肩を並べる優秀な同輩である。そんな頼りがいのある愛しい同輩を、三郎は抱き潰す勢いで一層強く抱きしめた。

ぴったりと隙間なくくっついた身体に忙しなく響いている鼓動がどちらのものなのか、もう分からない。

分からなくて、いい。

「おれも、三郎が好き」

抱きしめ合い肩口に顔を埋めたままそう呟いた勘右衛門は、身体を少し離してこちらを見上げるとふわりと柔らかく微笑んだ。きれいな顔立ちとは言えないはずのその顔を、三郎は素直にきれいだと思った。

華がほころんだような笑顔、とはこういうのを言うのだろう。胸がまたひとつ音を立てたのを感じながらそんなことを思った三郎は、そのきれいな笑顔に誘われるように顔を寄せ優しく唇を重ねた。

〈おしまい〉

――こんなにも、呆気ないものか。

爆ぜる火花、立ち上る煤(すす)と煙、何かが焦げる嫌な臭い。

思い描いたとおり燃え落ちてゆく様を直(じか)に眺めても、期待したような感慨が湧いてくる気配はなく。己が手で念願成就せしめたというのに、今この胸を占めるのは過去に味わったのと同じ無力感だけだった。

月のない黒々とした夜空、暗闇を背景に舞い踊る鮮やかなまでに赤い焔(ほのお)。視界を占めるそのふたつの色に、脳裏に焼きついたままの光景が鮮明に蘇る。

美しかった藍染の手拭いが無情にもただ朱(あか)く、黒く染まりゆく。止まぬ侵食が何を示しているのか正確に理解しながら、しかし現実を受け入れることができなくて。

俺はただこの手からこぼれ落ちてゆくものを、呆然と見送ることしかできなかったのだ。

暴かれるもの ～秘密と特別～

――ちからが、抜ける。

深く暗い夜の森で鉢屋三郎はひとり、力なく地に転がっていた。幸いにも周囲に人や獣の気配はない。風に揺れる微かな葉擦れの音と、浅すぎる己の呼吸音が耳に届くばかりだ。

こんな情けなくつまらない終わりになるなんて、正直全然思っていなかった。物心ついた頃からどこへ行っても才ありと評価されてきた自分が、まさか。謀略(ぼうりゃく)に陥れられた末に、あっさり命を落とそうとしているだなんて。

腹を抑えた手のひらに、じわじわと広がる生ぬるい液体の感触。ありがたいことに痛みはもうほとんど感じなくなっている。もうすぐ終わるからなのだろうな、と特に感慨もなく思った。

少しずつ抜けていく己の体温を他人事(ひとごと)のように感じながら、頭上を覆(おお)う木々の陰をぼんやり眺める。濃い闇の中に、枝葉の輪郭が徐々に浮き上がってくるのが見て取れた。

どうやら夜明けが近いらしい。ならばあと少し、もう少しだけ粘れていたのなら、逃げ切ることができていただろう。

……あと少しだったのに。

――「あと少しだったのに」？

己の思考を反芻して、自然とそう考えていたことに思わず笑いがこぼれた。

さっさと死んでしまいたいとさえ思っていたはずの自分が、まさにその時に至って生に執着することになろうとは。

死と隣り合わせの生、名さえ残らず闇に消える――だからこそ、忍びを志した。生家のしがらみに囚われたまま生きるのが厭わしく、かといって自ら命を打ち捨てるのも馬鹿らしいと思っていた己にとって最適の選択肢だったから。

だが念願どおりプロの忍者となってから、幾たび可憐な桜の花を愛でただろう。思えばこの人生、多くの日々を温かな陽の光の下で笑い、穏やかに過ごしてきた。そうなったのには、この道を歩み始めたばかりの頃からずっと傍らに居続けてくれた相棒の存在が大きかっただろう。半ば自暴自棄で選んだ道だったというのに、随分と幸せな誤算もあったものだ。

それでもまだ、足りないと。先を生きたいと思うなんて。

まったく、なんということだろうか。最後の最後でようやく、己の真の願いに気が付くなんて。己が根幹にあったはずの、幼き自身が強く抱いた虚ろな願いを忘れてしまうほど、毎日が当たり前に幸せだったなんて。

笑わずにいられるわけがない。

しかし。

この顔を快く貸してくれ、穏やかな日々をも与えてくれた大事な大事な友人に礼の一つも言えないまま。それどころか彼を危険に晒すような状況に陥ったまま、こんな形で。

独りで。

この世を去るのか。

彼は賢く優秀な忍びだ。自分がおらずとも、相棒が消息不明になった事実から危険を察して上手くやるだろう。迷惑をかけることが心苦しいだけで心配はしていない。

……けれど。

――……少し、残念だ。

友はおろか生き物の気配すら感じられない、静かすぎる夜の森。霞がかかり始めた視界に、最早興味も未練もない。

三郎は静かに瞼を閉じた。

――……鉢屋？

目を閉じていくらもしない内に、己が名を呼ぶ声が微かに聞こえた、気がした。

働きの鈍っている頭ではもう何を考えるのも億劫で、何者かを推測することさえしなかった。だが三郎の大事な大事な友人でないことだけは確かだった。彼は自分のことを『三郎』と、下の名で親しげに呼ぶ。

大体こんな時間帯にこんな森の中で、知り合いと遭遇する可能性などゼロに等しい。
空耳だったのだろう。空耳でなかったとしても、彼でない人間のために閉じた瞼をわざわざ押し上げるのは面倒だ。
故に三郎はそれを黙殺した。

声は、再び聞こえては来なかった。
やはり空耳だったか。
そう思ったちょうどその時、不意に頬に温もりを感じた。
思った以上に感覚が鈍っていたようだ。先の呼び声は空耳ではなく、誰とも分からぬその声の主がすぐ傍まで寄ってきて頬に触れているらしい。
だがすべてが億劫になっていた三郎は、どうせもうすぐ尽きる命だ構うものかと無視を続けた。

「――……うそ、」

永遠にも思えた沈黙を破り、葉擦れの音にさえ掻き消されてしまいそうなほど小さな呟きが頭上から落ちてきた。
遠ざかり始めた感覚の中で、不思議と拾い上げることができたその声に聞き覚えがある気がして、三郎は目は閉じたままでようやく、そこにいるらしい相手に意識を傾けた。頬に触れた温度が、小刻みに震えている。

「さ、……ぶろ……、う……？」

今度こそ確かに聞きとった。
明らかに震えているが、記憶にある低く落ち着いた声音。
しかし耳に馴染まない呼ばれ方。

――この、声は。

＊＊＊

「――――……ひっどい顔」

億劫そうに目を開けた男の失礼極まりない第一声に、しかし勘右衛門は怒る、という選択をすることができなかった。
忍務の帰りにたまたま通りかかった山道で、見知らぬ忍びが数人辺りをうろついているのを見かけた。気配を絶ち用心しつつ窺うと、どうやら彼らは何かを探しているらしい。
だが朝が近いからか、渋々と言った体で引き上げていった。

それを見送った勘右衛門は、念のため周囲の安全をよくよく確認してからお得意の好奇心でもってその森へ分け入った。そこで、地面に転がっている一人の男を見つけたのだった。

無造作に転がった男の装束は、赤黒い色に侵されて元の色が分からなくなっていた。

――もう長くはないだろう。どこの忍びだろうか。

一応警戒は解かぬまま徐々に距離を詰めていく。その途中で、勘右衛門の足は唐突にその場に凍りついた。

次第に和らいでいく闇の中に、見知った顔を見つけてしまったのだ。

白っぽい肌、力なく閉じられた目、静かに広がる朱(あか)――。

この顔がこの世に少なくとも二つあることを、勘右衛門は知っている。そしてこの男がそのどちらなのかも、勘右衛門には分かっていた。

だから、迷わず呼んだ。

一度目は、いつもどおりに。二度目は、ずっと呼びたくて、しかし呼べなかった呼び方で――。

「久しいな、勘右衛門」

「……なに悠長に挨拶(あいさつ)してんだ馬鹿野郎」

状況にそぐわない軽い調子の挨拶に、勘右衛門は衝撃から立ち直りきれぬまま暴言を返した。馬鹿と言われた三郎が、楽しげに笑う。勘右衛門は被っていた頭巾を外すと、横たわった彼の腹に押し当てた。

「馬鹿だな、分かってるくせに」

微かに口角を上げて笑う三郎に、勘右衛門は返事をしなかった。

お気に入りの藍染の頭巾はじわじわと朱に浸食され、黒く変色していく。その様をぼんやりと見下ろしながら、しかし勘右衛門がその手から力を抜くことはなかった。

――分かってはいた。頭では。しかし、解りたくなかった。

二人とも口を利かず、目覚めに向かう森のざわめきだけが周囲に満ちていた。

「……勘右衛門」

「なに」

名を呼んだ三郎に、勘右衛門はそっけない態度で即応した。だがその目は黒に染まり行く頭巾に固定したままだ。

室町狐狸合戦！

一流忍者を志す子どもたちの集う、忍術学園。夜も更け、いつもはにぎやかな忍たま長屋も既に静寂に包まれていた。

その一室でひとり『忍たまの友』の文を目で追いながら、尾浜勘右衛門はまったく別のことを考えていた。まだ肌寒さえ感じる晩春の夜風に灯明の火が揺らめく。

これから大勝負を仕掛ける。狙いは一人――

級友たちからはボーっとしているやつと思われている節がなくはないが、勘右衛門自身は自分がずるい人間であることを自覚しており、駆け引きは大の得意と自負していた。

絶対失敗はしない自信が、ある。

「――……本気なのか、勘右衛門？」

背後から不意に声がかかる。

来訪者の存在には気付いていた。勘右衛門は『忍たまの友』を眺めながら、彼が来るのを待っていたのだから。

自然と浮かんだ笑みを口の端に湛え、ゆっくりと振り返る。

「本気だよ、」

返り見ると、その人物は戸口の柱に身を預けて腕を組み、訝しげな顔でこちらを眺めている。そんな彼らしい佇まいに勘右衛門は笑みを深めた。

「来てくれてありがと、鉢屋」

室町狐狸合戦！

壱、たぬきの仕掛けた甘い罠

まず礼を述べると、来訪者・鉢屋三郎は片眉を跳ね上げた。予想どおりの反応に勘右衛門の笑みが一層深まる。

よく『無害そう』と評されるにこにこ笑顔を浮かべて鉢屋の顔を見つめていると、キツネ似のつり目でじっと勘右衛門を見返してくる。勘右衛門の真意を探ろうと言うのだろう。

だが勘右衛門がそれ以上行動を起こさないので、ため息をつきながら身を起こし後ろ手に戸を閉めた。勘右衛門の近くへやって来るとその場にやや乱暴に胡坐をかき、目線を落として何事か考え始める。

――……ま、おれは鉢屋が考えてることなんて、手に取るように分かるけど。

彼の様子を眺めてそんなことを考えつつ、勘右衛門は鉢屋の動きを待った。もちろんこれも作戦のうちだ。

待つことほんの数秒、沈黙していた鉢屋は相変わらず訝しげに口を開いた。

「……だが、何故私なんだ？ 房中術の練習なら……くの一にでも頼めばいいだろうが」

鉢屋は相変わらず訝しげに問うて来た。

――そう、それ。

勘右衛門は表情が動かないよう気を付けつつ鉢屋の目を見返して、思う。

妙なことを言われても発言主が本気なら真剣に考えた上で真面目に応える。鉢屋を調子のいいやつだと思っている人間が多いようだが、実際は誠実で優しい。そんな彼を勘右衛門は好ましく思っていた。

「いやー、男相手の練習もしとこっかなーって思って」

考えていることとは裏腹に、軽い冗談のような言葉を口にする。すると鉢屋は片眉を再び跳ね上げた。

「……なんだそれは。冗談ぬかしてるなら帰るぞ。私だって暇なわけじゃないんだ」

どうやら勘右衛門の軽い調子が少々癇に障ったらしい。

だがそれも勘右衛門の計算どおりである。内心したり顔で鉢屋に焦って言い訳をする――ような体裁をとる。

「だってさぁオトコノコが好きですー、とかいうスキモノなオッサンとかいるかもしんないじゃん？ もしもの時のための対策だよ！ で、やることに決めたはいいけど相手に困ってて。兵助にはさすがに頼めないし……」

同室の久々知兵助は、ずっと好きだったろ組の友人である竹谷八左ヱ門と最近付き合い始めた。二人を選択肢から外す正当な理由ができた上に、現在彼らは逢い引き中で不在だ。

交際の事実は二人の秘密らしく、兵助には勘右衛門にだけ教えると言われた。だが八左ヱ門の態度があからさまなため仲間内どころか同級生にもバレバレだったりする）

今晩、兵助はこの部屋には戻らないはずである。

「雷蔵に頼んだら鉢屋が怒るだろ？」

その雷蔵は委員会で不在。そこまで織り込み済み。

つまり、今宵は絶好の『鉢屋三郎騙し日和』なのである。

「……消去法かよ」

鉢屋が不服そうにボソッと呟いた。が、勘右衛門はそれを華麗に無視（スルー）し彼を拝むように両手を合わせ頭を下げた。

「てなわけで、鉢屋しかいないんだよ～！ ねっ、お願い！」

仰々しく頼み込むと、鉢屋は予想どおりに胡散臭げな顔で勘右衛門を見下ろしてくる。

「……真面目な い組とはいえ『もしものため』とかお前そこまで真面目な生徒じゃないだろが。何企んでるんだか知らんが、私はやらんから他当たれ」

本気でないと見抜いたのだろう、鉢屋はしらっと言い放つなり腰を上げた。勘右衛門はそんな彼をさらに慌てたそぶりで引き止める。

「わわわっ、待ってよ待って！ ごめんて！ ――房中術の練習ってのは嘘だよ。……まぁ、やることは一緒だけど」

「……はぁ？」

最後に小さく付け足すと、聞き取れなかったらしい鉢屋が不審顔のまま訊き返してくる。

それには応じずに、勘右衛門はにっこり笑顔で口を開いた。

「ねえ鉢屋、俺とヤろ？」

まるで散歩にでも出かけようかという軽い調子の誘いに、鉢屋はギギッ、と音がしそうなほど不自然に身体を動かした。

「――……一応訊くぞ勘右衛門。……何を、やろうって……？」

「だから、俺と交わｒ 「だぁあああーーーッ!!!」

鉢屋は、笑顔全開で即答しかけた勘右衛門を抱え込むと、その口をふさぎながら大声を出すことで続く言葉を阻止した。彼のあまりの慌てぶりに勘右衛門は内心で爆笑する。

そんなことを知る由もない鉢屋は辺りをきょときょと窺った後、抱えた勘右衛門を若干声を抑えて叱りつけた。

「おまっ……そんな破廉恥なことを声を大にして言うなっ！」

「デカい声出したのは鉢屋じゃんか～」

口を塞いでいた鉢屋の手を力ずくで外し唇を尖らせると、全力のゲンコツをお見舞いされた。

「ってぇー！ なにすんだよ鉢屋っ！」

「やかましい！ そういう問題じゃないだろうが！」

勘右衛門が頭を庇い文句を言う傍らチラリと横目で窺うと、鉢屋は耳を赤らめカッカと怒っている。『千の顔を持つ男』の

異名を持つ彼のごく自然なそぶりを愛おしく思い、ふわりと笑みが浮かぶ。だが勘右衛門はすぐに顔を伏せてその表情を消した。それからくどくどと説教をし続けている鉢屋の首に正面から腕を回して体重をかける。ぎょっとしている彼を押し倒すと、下敷きにした鉢屋の鼻に自分の鼻がくっつくほど顔を近づけその目を覗きこんだ。

動揺と混乱に揺れる、薄色の瞳。これだけはどうあっても偽ることができない、鉢屋三郎本人のものだ。

「鉢屋さあ、雷蔵（すきなやつ）に手出せなくて溜まってるだろ？ おれも溜まってるしー、鉢屋そーゆーの上手そうだしー、おれとヤろ？ って言ってんだけど。結構お買い得だと思うけど？」

「なっ……ば、馬鹿か！」

何でもないかのようなゆるい言葉回しと甘い言葉を駆使して誘惑する。押し倒された鉢屋は二の句も告げず、目を白黒させるばかりだ。

「おれも鉢屋も溜めずに済む、利害一致だろ！ おれは気持ちよければいーし、雷蔵には秘密にしといてあげる。なんならおれを雷蔵だと思ってくれても構わないし。……な？」

誘惑を続けながら、未だぼんやり気味の鉢屋に自覚を促すように彼の股間を指でつ、と撫でた。

「うぉおっ!?」

「っおわぁ!?」

指の感触に驚いた様子で、鉢屋は勘右衛門を首にくっ付けたままがばっと起き上がった。予想外の動きに、勘右衛門も思わず声をあげる。腹筋の強さに感心し目を瞬いていると、彼の首に回した腕をがっしと掴まれた。力ずくで引っぺがそうとする鉢屋の動きに抗い、勘右衛門は意地でも逃がさんとばかりにその首にしがみつく。

「〜〜〜〜〜っ、えぇい！ 離れろ勘右衛門んん〜〜〜〜〜!!」

「いーやーだーねえええー！ 鉢屋がぁー、うんってぇー、言うまでぇー、離れないもんねえええ!!」

互いに妙な雄たけびを上げながらの意地と意地のぶつかり合いを暫し続けた後、ついに鉢屋は降参した。

鉢屋もまたその契約に惹かれていたのだろう……若さ故に。

「……絶対に、誰にも秘密だからな」

「もちろん。契約成立だね！」

ぶっきらぼうに言いながら鉢屋が出した小指に、勘右衛門はクスリと笑いながら自分のそれを絡めた。

木々のざわめきと鳥の鳴き声くらいしか聞こえてこない、穏やかな休日の午前。

文机に向かっていた勘右衛門は、筆を休めて窓から見えるすっきりと晴れ渡った空を恨めしげに見上げた。

弐、きつねとたぬきとお団子と

「こら、サボるな」

唐突に傍らから筆の柄でポカリと頭を叩かれた。勘右衛門は被害部位を両手で庇いつつ、加害者をじろりと睨む。

「――休日に学級委員長委員会の仕事とか、ホントないわー」

「暇だったんなら何も問題ないだろ。始めてからまだ半刻も経ってないんだ、文句言ってないで筆動かせ」

目線を書類に落としたまま淡々と切り捨てる鉢屋の横顔を眺めて、勘右衛門は小さくむくれてからため息をつくと渋々ながら再び筆を動かし始めた。

珍しく鉢屋が「今日暇か？」なんて訊いて来ると思ったらなんのことはない、委員会の書類仕事だった。期待したおれが馬鹿だった、と内心で本日幾度目かの自己嫌悪に陥る。

恋人まがいの関係を結んだとはいえ、鉢屋が委員会の活動以外で勘右衛門を誘い外出するなどありえないことだった。欲求不満を解消するための関係でしかないのだ、少なくとも鉢屋にとっては。元々勘右衛門がそういう提案をしたのだから、当然の認識ではあるのだが。

そもそも勘右衛門が仕掛けたのは、肌を合わせる間柄になれば、雷蔵と比べてあまりにも遠い鉢屋との距離が多少なり縮められるのではないか、と考えたからだった。しかしその期待は大いに外れた。肉体関係を結ぼうとも、彼自身の意識が変わらない限り『委員会の同輩』から関係性が変わるはずもないのである。

休日である今日、鉢屋がわざわざ勘右衛門を捕まえて仕事に勤しむのは、雷蔵が委員会の買い出しに出ている本日中に自分も委員会の仕事を片付けてしまおうという魂胆だ。鉢屋は何も言わなかったが、勘右衛門にはお見通しである。

雷蔵は来週から実習のため暫し学園を離れる予定である。そして今目の前にある書類の締め切りは、ちょうど彼が出立する日だ。これらが本日中に片付けば、今夜から出立する日まで雷蔵と気兼ねなく一緒にいられる、というわけなのだ。

――分かってるさ。鉢屋の頭は雷蔵のことで一杯で、友達に毛が生えた程度のおれが入る余地なんてないことくらい。

勘右衛門は筆を動かしながら内心で自嘲する。
分かってはいても面白くないものは面白くない。共に過ごせるのが嬉しくはあるが、鉢屋の都合で休日に仕事をさせられているのは事実である。文句を垂れる権利くらいはあって然るべきだ。
そのような考えから勘右衛門は筆を放り出すと気だるげに机に身をもたせかけ、不満を友人の立場でなら言える範囲の文句に変換して鉢屋にぶつける。
「だってさあ、こおーんな気持ちよく晴れたお出かけ日和に、何が悲しくって部屋に籠もって仕事してなきゃなんないんだよ。ありえないって！」
「文句言ってても構わないが筆は動かせよ」
一応配慮して控えめにした文句にもまともに取り合ってもらえず、さすがの勘右衛門もムッとした。だがそこでふと、いいことを思いついた。すぐさま顔に笑みを乗せ鉢屋の方へ身を乗り出す。
「ならこれが終わったら、一緒に団子食べに行こうよ。一年は組のしんべヱに聞いたんだけど、最近町に美味しい団子屋ができたんだって。もちろん鉢屋の奢りで！」
「はぁ？ 何で私が……」
突拍子もない話だったからだろう、鉢屋が訝しげに視線を投げてくる。ようやく彼の視線を自分の方へと向かせることができた勘右衛門は内心でほくそ笑んだ。
「よりによって今日なのって、来週雷蔵が居ないからだろ？ 奢りなら全面的に協力してやらんこともないんだけどなァ。ま、おれは別に締め切りまで毎日やってもいいんだけど～」
素知らぬふりでそう告げれば、図星だったのだろう鉢屋はぐっと言葉に詰まった。不満げな様子にわざとらしい笑顔で圧をかけてやると、彼は仕方なさそうにため息を吐いた。
「……分かったよ。奢ってやるから。二皿。だから今日中に全部終わらせるぞ」
「よっしゃあ！ 鉢屋の奢りで初デートの約束ゲットだぜ♪ おーし、やるぞお～ッ！」
居心地悪そうに是と答えた彼に、勘右衛門は素直に破顔すると意気揚々と書類に取りかかる。
「デ!? ……何言ってんだ、アホか！」
「なんにも間違っちゃいないだろ？ おれたちが二っ人きりでお・出・か・け♡ するんだからさあ～」

面食らった様子の鉢屋に、勘右衛門は書類から目を離さぬまま冗談を返す。

「ば……っ、秘密だって約束だろう⁉ 誰かにバレたりしたらどうすんだよ‼」

想定外にも大層慌てているらしい鉢屋に、勘右衛門はつい吹き出しそうになった。思わず筆を止め、今なお険のある視線を向けて来ている彼の真面目な表情をまじまじと観察する。

「――何言ってんだよ鉢屋。よくある冗談だろ？ 友達同士でデートって嘯いて遊びに行ったりすることなんてさ」

おれもよく兵助と行ってたよ、と付け足すと鉢屋は呆けた顔で動作停止した。やや呆れた勘右衛門はしかし、再び筆を動かしながら再び口を開いた。

「まぁ最近はしてないけどね。軽率に兵助付き合わせらんないしい。でもたまにはお出かけしたいワ、アタシだってェー」

冗談めかした言葉を続けたが期待していたツッコミはなく唐突に沈黙が降りた。スベったらしいことにやや羞恥を覚えた勘右衛門は、反応のない彼を横目でちらっと窺った。

鉢屋は、ただじっとこちらを見ていた。想定にない反応に驚いて顔ごと彼の方を向けたがそれでも視線は合わず、どうやら虚空を見つめぼんやりしているだけであるらしいと知る。彼が何を考えているのかは分からないが、スベったわけではないようだ。そう察した勘右衛門は、静かに長く息を吐いて気持ちを立て直した。

「ていっ」

「だっ！」

筆の柄で軽く頭を叩いてやると、鉢屋が反射的に目を閉じ短い悲鳴をあげる。

「さっきのお返しな～。早く片づけたいんだろ？ 筆止まってるよ、鉢屋」

「……あ、ああ」

そう指摘すると、鉢屋は唐突な暴力に文句も言わずにただ被害部位をさすりながらのろのろと書類に向き直った。やや不審に思ったが、彼は早くも書類仕事に集中し始めている。そして勘右衛門にとって最も重要なのは、無理やり取り付けたデートを実現させることある。故に自分の分を早々に片付けるべく、疑問を頭から追い出して書類に取りかかった。

＊＊＊

陽が天頂から降り始めた頃、ようやくすべての書類に片がついた。あと一刻もすれば辺りは橙色に染まり始めるだろう。だが夕食まではまだ時間があり、今日を逃すと雷蔵の出立後になるだろう。そこで二人は本日団子屋に行くことにした。

鉢屋が書類を提出し、その足で外出届をもらって来るのでその間に勘右衛門が部屋を片付けておく手はずになっている。

勘右衛門が鼻歌交じりに文机を拭いていると。不意に戸を叩く音が耳に届いた。振り返ると、戸の隙間から雷蔵が覗いていた。外出から戻った足で立ち寄ったらしく、私服姿に荷を背負っている。彼がこの部屋を訪れるなど珍しいことだ。

「あれ、雷蔵？　お帰り～、鉢屋なら今席外してるけど……」

やや惑いながらも声をかけ、用向きがあるのだろう鉢屋の所在を添える。すると雷蔵は首を小さく横に振り微笑んだ。

「ただいま。二人が委員会の仕事中って聞いて差し入れに来たんだ。しんべヱのイチ押しだっていう団子屋に寄ったんだけど、本当に美味しかったからお土産に買ったからさ。二人で食べて。じゃ、僕は部屋に戻るよ。仕事頑張ってね！」

雷蔵は笑顔で告げるなり、包みを手渡し去って行った。

（――……ああ、……やっぱり、ね……）

包みを確認して勘右衛門は瞑目した。知らず、小さなため息が唇から漏れ落ちる。

雷蔵の土産の団子は、これから鉢屋と行く予定の店のものだった。目的の団子がここにある以上、外出する理由はなくなってしまった。

間が悪いというか運が悪いというか。鉢屋の雷蔵に対する思いを利用している自分への罰なのかもしれない。勘右衛門は神様など信じてもいない癖にそんなことを考えた。

「勘右衛門、済んだぞ」

優秀な忍びらしく足音も立てずに鉢屋が戻ってきた。戸を開く音と鉢屋の声を背中で聞いた勘右衛門は、いつもどおりの笑みを顔に乗せて振り返った。

「お帰りー、ご苦労さん。今雷蔵が帰ってきて、これお土産だって。それがなんと例の店の団子でさ！　団子の方から来てくれるなんて、ミラクルタイミングだよね～」

「――……、はあ」

一息に説明すると、鉢屋は状況が呑み込めないらしく呆気にとられた様子でこちらを眺めつつ気の抜けた相槌を打った。皆まで言わねば分からないらしい彼にやや苛立ちを覚えつつ、勘右衛門は笑みを維持したままさらに口を開いた。

「てなわけで、鉢屋の分も全部おれがもらうから。まだ片付け終わってないし、鉢屋は先上がっていいよ。ああ、雷蔵は部屋に戻るって言ってたぞ。んじゃ、お疲れ～」

なんでもないかのように先の言外に具体的に言及してから鉢屋に背を向けた。そのまま、『おれって本当に優しいな』などと自画自賛風の自嘲を内心でしながら、今なお片付け中であるかのように装う。

本当は片付けもほぼ終わっていたのだが、今の勘右衛門にはこうする他に鉢屋の前で平静を装う術がなかった。

雷蔵との時間を質に取り約した外出程度で有頂天になり、出かける理由を失い落胆した。こんな体たらくではせっかく手に入れた『毛が生えた関係』すらすぐに失ってしまうだろう。この関係を維持するためには、もっとしっかりしなければならない。そう己を叱咤する。

「失礼します、鉢屋先輩はいらっしゃいますか？」

唐突に幼い声と共に戸を叩く音がした。振り向くと、委員会の後輩である庄左ヱ門がひょっこりと顔を出した。

「お、庄左ヱ門。どうした？」

「学園長先生から書類を預かってきました」

庄左ヱ門が差し出した紙の束を見て、鉢屋はあからさまに嫌そうな顔をする。

「さっき一仕事終えたばかりだってのに……人使い荒いなあ」

文句を言いつつそれを受け取った鉢屋は、すぐに書類に目を通し始めた。

勘右衛門はその場に膝を突いて待機している庄左ヱ門に手招きした。座布団に座らせると、彼は礼儀正しく礼を言って膝を揃えて座る。

「お二人でお仕事されてたんですか？」

「そうだよ～。庄左ヱ門は今日、何してたんだ？」

「友人と町へ下りてました。……でも、声をかけてくださったらよかったのに。僕も委員ですし、彦四郎も言えば絶対に来ます。どうして言ってくれなかったんですか？」

上目遣いにそう尋ねられた。歳の割に冷静な庄左ヱ門には珍しく、すねているような雰囲気がある。なんだかんだ言いつつも鉢屋を尊敬しているのだろう庄左ヱ門は、声をかけてもらえなかったことに不満があるのだろう。彼の言うとおり、彦四郎も今日二人で仕事をしていたと知れば同じ反応をするだろうことは容易に想像できた。

（いいなあ、こんなにしっかり慕われてる鉢屋が羨ましい）

勘右衛門はしょげ気味の庄左ヱ門を微笑ましく見つめつつ、鉢屋に少しだけ嫉妬した。

本当は一年生でも分かる書類もあったが、休日でなくともできる仕事に可愛い後輩たちを巻き込むつもりは毛頭なかっただろう。鉢屋は後輩をものすごく可愛がっている。そんな暴挙をするわけがないのだ。

「今日の書類は庄左ヱ門たちにはまだちょっと難しいから、おれたちがやらなきゃいけなかったんだよ。仕事があるって知ったら二人が来てくれるのは分かってたから言わなかったんだ。ありがとな」

庄左ヱ門を慰めようと、実感を込めて言葉を紡ぎながら頭を撫でると、顔を伏せられてしまった。子ども扱いしすぎただろうか。勘右衛門は少し落ち込んだ。

「――あ、なんだ。もう済んでる件の報告か」

ぱらぱらと資料をめくっていた鉢屋が独りごちた。署名をするが早いか、庄左ヱ門に紙の束を差し出す。

「悪いが、これ学園長先生にお返ししに行ってくれるか？」

「あ、はい。任せてください」

庄左ヱ門はぱっと顔を上げた。いつもと変わらぬ真顔だが纏う空気に喜色が滲んでいる。それを微笑ましく見ていると、鉢屋がもう一つ何かを差し出した。

その差し出された物に、勘右衛門は目を剥いた。

「おい鉢屋⁉ それはおれのもが」

「悪いな、助かるよ。ご褒美にこの団子をやろう」

鉢屋が差し出したのは他でもない、雷蔵からの土産である団子の包みだった。文句を言おうとした勘右衛門はしかし、素早く鉢屋に拘束され口を塞がれた。理解できない展開に、抗議の声をあげながら腕から逃れようとじたばたする。

「……あの、僕……そんなに大したこと、してないんですが」

「いいから持ってきな。彦四郎と分けて食べるといい」

庄左ヱ門が戸惑ったように視線を向けてくる。そんなつもりはなかったが、鉢屋と勘右衛門の間で板挟みにしてしまっていた。これでは庄左ヱ門が可哀想である。そも鉢屋の行動に文句があっただけで団子に執着していたわけではない。

庄左ヱ門に笑顔を向けて頷く。すると庄左ヱ門はホッとした顔をして団子の包みをそっと受け取った。

「……じゃあ、お言葉に甘えて頂きます。ごちそうさまです」

庄左ヱ門は笑顔で会釈をすると静かに部屋を出て行った。

後輩の気配が完全に遠のいてから、勘右衛門は鉢屋の腕から力ずくで抜け出し距離を取った。

「どういうつもりだよ、あれおれの団子なのに。しかも雷蔵からのお土産だぞ？」

「……うるさいバ勘右衛門。さっさと支度しろ」

恨みがましく意図を問うも、鉢屋からは聞き捨てならない言葉が返ってきた。

「おい失礼な呼び方すんな！ 誰がバカだ、よ……？ 支度？ って何の支度？」

反射的に噛みついた勘右衛門はしかし、後半の意図が理解できずきょとんとする。鉢屋は居心地悪げな顔で背を向けた。

「出かける支度に決まってるだろ！ 団子食いに行くんだろうが。早くしないと店が閉まっちまうだろ、さっさとしろ」

苛立ち交じりの鉢屋の言葉を、その背を見つめてぼんやりと聞く。勘右衛門を振り返らない彼の耳は、じんわりと赤みを帯びていた。

現実味のなさにぼんやりしたままその場に座り込む。と、焦れたのか足音荒く歩み寄ってきた鉢屋に脈絡なく叩かれた。頭に走った軽い衝撃に、これが確かに現実であることを知る。

「……約束しただろ。外出届もあるし、後から兵助なんかに言いつけられても困るしな！ ――……久々の外出なんだろ」

そんなことを言いながら、鉢屋はへたり込んだ勘右衛門に手を差し伸べてくる。

「ほら、行くぞ」

――軽率に兵助付き合わせらんないしぃ。

――たまにはお出かけしたい。

鉢屋は勘右衛門の話を、ちゃんと聞いていたのだ。

差し出された手をとりながら、勘右衛門はなかなか顔を上げることができなかった。だが鉢屋も背を向けたまま振り返ることはなかったため、無理をする必要もなくて。

勘右衛門は少しだけ、小さく泣いた。

（――これだから、鉢屋を好きなのを辞められないんだ……）

たとえ鉢屋が雷蔵を好きでも。

身代わりの恋人にしか、なれなくても。

参、笑顔の仮面

陽が落ちて辺りは薄闇に包まれた。世界は、もう間もなく眠りへと落ちてゆくだろう。

今宵は新月。微かな星明かりだけが空に瞬く闇夜は、忍者の縄張り（テリトリー）だ。

本日の授業は実戦形式での学年合同実習だ。裏々々山にて、二人一組で持ち札を取り合い最終的な所持数を競うのである。定められた規則を侵した者や終了時刻までにスタート地点へ戻れなかった組は失格、補習決定だ。

勘右衛門の本授業における相棒は鉢屋だ。本来なら雷蔵と組んだだろうが、その雷蔵が昨日から体調を崩し寝込んでいるため欠席である。

鉢屋はいつでもどこでも雷蔵と一緒にいるため、勘右衛門が授業中に鉢屋と二人でいられることはほとんどない。故に勘右衛門は、苦しい思いをしている雷蔵には申しわけないがこの状況を少しばかり嬉しく思っていた。しかし。

『勘右衛門、なにやってる。遅いぞ。早くしろ』

辺りをうかがっていた勘右衛門に、上方からつっけんどんな調子の矢羽が飛んできた。見上げた先にいる矢羽の主は、太い木の枝上に陣取って辺りを見渡すばかりでこちらを一瞥もしない。そんな鉢屋に勘右衛門は不満げに眉を寄せる。

実習が始まって暫く経ったが、鉢屋は常にどことなく苛々している。理由は言わずもがな、雷蔵のことだろう。

雷蔵は昨日から寝込んでいたのだが、実習が始まる直前になって高熱を出した。恐らく今も新野先生が看病しているのだろうが――雷蔵が少しでも怪我をすると即医務室へと連れ去る鉢屋のことだ、心配で居ても立ってもいられず早く傍らに戻りたい焦燥に駆られ苛立っているに違いない。

鉢屋のことを冷静に分析し、勘右衛門はため息をついた。

雷蔵は勘右衛門にとっても大事な友人だ。当然、心配ではある。

だが実習には集中して取り組んでもらわねば困る。同級生たちは皆、勘右衛門たちと仲の良い八左ヱ門や兵助も本気で取り組んでいるはずなのだ。

尤も、六年生と並び立つほどの武術の腕前と聞く鉢屋が、五年生を相手に下手を打つことなどないのかもしれないが。

不満は膨らむが、今は実習中だ。鉢屋と一緒であることに変わりはないと前向きに切り替え、彼と合流することにした。だが鉢屋は勘右衛門が追いつくのを待つことなく、木から木へと移動を始めた。

二人組で動かねばならない実習中だというのに、単独行動を取っているようにしか見えない。だが現時点でより多くの札を集めているのは鉢屋で、普段から実習においては成績の劣る勘右衛門が文句を言うのは少々憚られた。

勘右衛門は、先刻まで鉢屋がいた枝の上で動きを止めた。遠ざかっていく鉢屋の背中を追いもせずただ見つめる。

気持ちが、ほんの少しだけ、沈む。

勘右衛門は顔を伏せた。

今の鉢屋の頭には、自分はこれっぽっちも存在していない。

昨晩も抱き合った仲だけれど――。

雷蔵にまつわることばかりが、鉢屋の言動を支配している。雷蔵と離れ勘右衛門と行動を共にしている今でさえ、雷蔵が心配のあまりの苛立ちに翻弄されている有様で。勘右衛門と関係を結んだのも、遡ればやはり雷蔵の存在がある。

――当然だ、鉢屋は昔からずっと雷蔵が大好きなんだから。

分かってるさ。

分かってる、けど――……。

言い聞かせるように何度も繰り返す『分かっている』の言葉、その後ろにまとわりつく二文字。

淀んだ思考に沈んでいた勘右衛門は、ふいに背に嫌な視線を感じて素早く身を翻した。

二間（さんめーとる）ほど離れたの木の上に、他の組だろう忍たまが二人、顔になんとなく癇に障る笑みを浮かべ腰かけている。実習中である今、鉢屋を除く同輩は全員敵だ。だがそれ以上に直感的な嫌悪を覚えた勘右衛門は彼らを黙したまま睨めつけた。

「見ろよ、尾浜が一人でいるぜ」

「ラッキーだな、絶好のチャンスじゃん」

二人組は意味ありげな発言をした。その不遜な態度に少々苛立ちを覚えたが、勘右衛門は努めて冷静に尋ねる。

「――……何がラッキーなんだよ？」

露骨に刺々しさを滲ませた問いに、しかし二人が嫌な笑みを収める気配はない。それどころか一層あからさまに、にやにやといやらしく笑った。

「武術に優れる鉢屋から札を奪うのは至難の業だけどさぁ、……尾浜からだったら取れんじゃねえ？」
「なーんかムカつくんだよな、お前ら。級長だからって偉そうにしてて。おおっぴらに尾浜いたぶれて、札奪えば鉢屋の妨害にもなるし俺らは有利になる。一石三鳥ってな！」
「――なんだと?!」
不遜で失礼な発言に、さすがの勘右衛門も怒りを抑えきれずに凄んだ。それでも二人が臆する様子は見られない。
「癪だけど、確かに尾浜も優秀は優秀なんだろうな。テストの点もいいし。……けど、実技は結構普通だもんなぁ？」
「実技の時は目立たないしな。二人でかかれば――余裕だろ」
言うが早いか二人が勘右衛門めがけて襲いかかってくる。
勘右衛門は臨戦態勢を取った。飛んでくる手裏剣の軌道を読んで避け、迫る刃を苦無で受け流して間合いを取る。昨晩鉢屋が好き放題したせいで身体は鉛のようだったが、実習で用いる武器には指定があるため、軌道が読めれば避けるのは容易い。尤も、堂々と侮っていた時点で彼らが大した力量を持っていないことは明白だったが。敵を侮るのは忍の三病の一つであることは常識である。
新たに飛んできたそれの、軌道を目算して避ける――だがそれは想定外の軌道を描いて勘右衛門の脇腹に食い込んだ。
「――ッ!? ぃ……っ」
みしり、と嫌な音がした気がした。
想像以上に重い衝撃に、勘右衛門は身を折って膝をつく。
――かなり、痛い。
負傷した部分を手で探ると、手の平に鉛玉のような重くて丸いものがごろりと転がった。通りで軌道を読み違えたわけである――本実習では使用禁止されている武器だった。
身体の重さを理由に楽をしていたのが裏目に出た。
身を折った勘右衛門に二人が肉薄する。勘右衛門は集中力を高めて痛みを意識から切り離し、素早く体勢を整えた。
迫り来る拳を身体を反らして躱し、そこへ飛び込んできたもう一人の鳩尾に蹴りを叩き込んだ。吹っ飛んだ生徒は少し先の木の幹に背中からぶつかり根元に崩れ落ちる。
その隙に、もう一人の足を払い地面にねじ伏せた。

再び静けさを取り戻した夜の森を、ざあ、と涼やかな風が音を立てて吹き抜ける。

癖のある長い髪が風に煽られ舞い踊る。

「――二対一で、反則しても勝てないんだ？　余裕、ねえ……笑っちゃうよ」

勘右衛門は、ねじ伏せた生徒を足蹴にして嗤う。その顔を見上げて、敗れた生徒は戦慄した。

そして、理解した。

勘右衛門が実戦で目立たないのは、実力がないからではないのだ。周りにいるのが戦闘力の高い者ばかりであるだけなのだと。そんな猛者たちともそれなりに渡りあえるほどには、彼もまた優秀であるということを。

だが彼はその真実を垣間見てすぐ、勘右衛門によって意識を絶たれた。

勘右衛門は気絶させた生徒を、もう一人と共に木の根元へ寄りかからせた。悪意を持って襲ってきたとはいえ今は実習中であり、彼らは勘右衛門の同級生である。自身の級友ではなくとも、級長としてそのまま放置してはおけない。

それぞれの懐から素早く札を抜き取ると、勘右衛門は鉢屋の消えた方角へ駆けだした。

しかし幾ばくも行かぬ内に、勘右衛門は痛みを覚え始めた。緊張状態を抜けてもみ消していた痛みが戻って来たのである。打撃系の武器だったため出血はないだろうが打ち身になっているのだろう、動作に合わせて重い痛みが体内に響く。

「いたた……、ちょっと骨に、かかってるかな……。折れてないといいんだけど……」

痛みを誤魔化すように独り言をつぶやきながら、勘右衛門は駆ける。

二人一組の実習中に一人でいるのは、先刻のように狙われやすい。早く鉢屋と合流しなければ――

「――勘右衛門！」

その時、声が上から降ってきた。足を止めて見上げると、ちょうど鉢屋が勘右衛門のすぐ頭上の枝に飛び移ったところだった。負傷のこともあって、勘右衛門は鉢屋の姿にほっと息をついた。

――はちや、あのさ、

勘右衛門はこれまでの経過を鉢屋に伝えようと口を開こうとした。しかし。

「どこいってたんだ？ 勝手に動くなよ」

一言目になじられて勘右衛門は憤慨した。

（勝手に動くなだって!? 勝手にいなくなったのはそっちじゃないか!!）

怒りに任せてそう怒鳴りつけてやろうと大きく息を吸い込む。と同時に、脇腹に激痛が走った。痛みのあまり一瞬呼吸さえ止まる。

痛みはすぐに弱まったものの、勘右衛門の身の内に留まってしまった怒りが後から噴出してきた別の感情と混ざり合い、勘右衛門の意欲をそぎ落としていった。もはや事情を訴える気すら失せた。

「――あー、ごめんごめん。札取ってきたから許してよ」

「……ったく」

勘右衛門は懐から取り出した二枚の札を振りつつヘラヘラと謝った。だが鉢屋はそれ一瞥し、呆れたように息をついただけだった。

そんな鉢屋の態度もまた、勘右衛門の心を蝕む。入り乱れぐちゃぐちゃになった感情が、心の奥底に凝っていく。

「もうすぐ終了時刻だ。ハチたちにだけは出くわさないように気を付けないとな……移動するぞ。上がってこい」

早くも策略に思考を切り替えたらしい鉢屋は、言うが早いか木から木へと渡り始めた。勘右衛門の異変や怪我にさえ、気付かない。

そんな鉢屋に、勘右衛門は負傷を感じさせない動きで素早く木に登り、鉢屋に並ぶ速度で移動を始めた。無茶な動きに脇腹が悲鳴を上げる。脳はその痛みを正確に認識していたが、折れた心がその感覚を麻痺させていた。

――鉢屋に後れを取るものか。怪我に気付かせるものか。

もはや、意地だった。

ついに迎えた終了時刻。スタート地点には半数程度の生徒が集まっていた。刻限の内に遂行し戻るのもまた忍者に必要な技量である。故に、時間内に自力で戻ってきた生徒のみを対象として成績評価が行われた。

最優秀は僅差で八左ヱ門たちに勝った尾浜・鉢屋組だった。同級生たちから拍手が送られるが、鉢屋はむっつりとしている。そういう態度が先刻勘右衛門が遭遇したような敵を作るのだ。勘右衛門は痛みをこらえて拍手に笑顔で頭を下げる。

「では、本日はこれまで。私たちは返ってきていない者たちを回収してくるから、お前たちは先に学園へ戻っていなさい」

木下先生はそう指示を下して、他の先生方と共に森の中へ散っていった。

直後、鉢屋が猛烈な速度で学園へと駆け出した。勘右衛門は予想どおりの行動にでた鉢屋をただ見送る。

「ほぁー、鉢屋のやつマジで早ぇな。さすが雷蔵マニア」

「勘右衛門っ、どこか痛むのか?!」

呑気な感想を漏らしつつ歩み寄ってくる八左ヱ門を尻目に、兵助が血相を変えて飛びついてきた。八左ヱ門がひどく驚いた様子で兵助を窺っているが、彼はまっすぐに勘右衛門だけを見ている。その表情は真剣そのものだ。

兵助は、同様に目を丸くしていた勘右衛門の前髪を無造作に掻き上げる。そうされて初めて、勘右衛門は自分が大汗をかいていることに気が付いた。

「すごい脂汗だぞ!? どうしたんだ、どこか怪我したのか?!」

兵助が抱き着くように勘右衛門の身体をぺたぺたと触る。さすがに五年も同室をやっている兵助に、遠慮や躊躇はない。手際よく触診を進める兵助の手は、勘右衛門がわたわたしている内に負傷箇所へと至った。触れられた痛みの大きさに、堪えきれなかった小さな悲鳴が勘右衛門の口から漏れる。

しまった、と思った時にはもう遅かった。

微かな悲鳴を聞き咎めた兵助が、すぐに勘右衛門の上衣をまくり上げる。

八左ヱ門が小さく驚きの声を漏らし視線を逸らした。その顔は赤く染まっている。小さな灯しかない闇の中故薄ら希望を持っていたのだが、どうやら見られてしまったらしい。

兵助は勘右衛門の肌に残る情事の痕に一瞬戸惑った様子を見せたが、すぐさま持ち直し脇腹を診た。それから勘右衛門を抱え上げ一目散に駆けだした。八左ヱ門が慌てて後に続く。